
biohazard 4 the magnet

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

biohazard 4 the magnet

【Nコード】

N3361R

【作者名】

蜘蛛の血

【あらすじ】

とあるヨーロッパの田舎町。

そこに赤鬼と呼ばれるサイボーグが舞い降りる。

opening(前書き)

この人なら大丈夫！
ってな感じで書きました。
どうぞ

opening

2024年私にはトラウマだ発端はイカルガでの猟奇殺人事件だった。

この裏には統制機構のウイルス実験がからんでいた。

T-ウイルスがイカルガに流出、人は次々とゾンビ化し階層都市全域が地獄となった。

事態を重く見た大統領および第七機関は階層都市全体の「滅菌作戦」を実行に移した。

政府は統制機構に研究禁止命令を発し、信頼は暴落し事実上の崩壊となった。

あの事件から六年…

私はココノエの気まぐれで適当な改造を受けていた。

統制機構に協力するという建前を持って情報を仕入れるはずだった。

「まったく貧乏くじだぜ。あんたいったい何者なんだ？」

「ん？」

「カグツチからわざわざ御苦労なつこつたな？」

「自己紹介をする必要もない。用件は聞いているだろう。」

娘の搜索だ。」

「一人でか？」

「我々でこんな山の中、レクリエーションでもやるのか？」

それともそんなことを考えていると？」

「変な奴だ。まあ、署長の命令でしようがないけどよ。ちよろい仕事じゃねえな。」

「頼りにしてるぜ。」

統制機構のある少尉が拉致され、その捜査のために地上まで降りてこんな片田舎にやってきたのだ。

情報部の話ではこの辺で黒装束の集団が、その少尉似た女を連れていたとの情報をつかんらしい。まさか、最初の任務が救出とは…

「おい、何だよ。急に冷えてきやがった。

……気のせいか。

待たせたな。」

「ここから先が例の村だ。」

「少し様子を見てくる。」

「駐禁はとられたくねえし。俺等は車を見はつとくぜ。」

(今の時代に駐禁はないだろう。)

「まあ、そうしてくれ。」

「頼んだぜ。」

「……なんとということだ。」

「何か言ったか。」

「いや、何も。」

つてな感じで村に出る。

PPPPPP

通信が入った。

「よおテイガー、いつものごとく私がサポートに回る。」

「ああ、よろしく頼むぞ。」

ターゲットの名前は、ノエル＝ヴァーミリオンだったな。」

「そうだ。統制機構の少尉だ。」

その上、蒼の継承者だ。」

「理由はよく分らないがそんな娘を拉致するとは何を考えているん

だ。」

「そいつらに関してはこっちでも調査しておく。」

「了解した。」

P

「さて、とりあえず人を捜さねば。」

と言ったが降りてすぐに民家を発見した。

「こんなはずれに一軒だけとは見張り小屋のようなものか？」

「あいつが例の。」

何の躊躇もなく民家に入る。

そこには、見た感じは普通の中年男性が暖炉に火をともしていた。

「すまない、少し聞きたいことがある。」

男性に反応はない。

「……………」

テイガーは男性に近寄り、写真を取り出した。

「この娘のことを何か知らないか？」

「ロリガデガロン！」

「すまないココノエ、日本語にしてくれ。」

「ああ、すまない。ほれ、ぼちつとな。」

「此処で何をしている。出ていけこの野郎！」

「……………どうやら邪魔なようだお暇させてもらう。」

そう言っつてテイガーは老人に背を向けて立ち去ろうとする。

「……………ウオアアアア！」

「！」

老人がおので襲ってきたところをバックステップでぎりぎりよける。

「何だというのだ。」

腕を向けて戦闘態勢をとる。

「動くな！」

男性は止まらない。

「動くなっ！」

二度目の忠告にも止まる気配がない。

「アアアアア！」

「グッ！ しかたあるまい。」

テイガーは、斧を弾き、男性を殴り飛ばした。

「……死んではないはずだが。」

ヴォンヴォンヴォンヴォン！

突如エンジン音が鳴り響く。

「な、なんだ？」

テイガーは民家の格子の隙間から外をのぞく。

「な、なんだあいつら？ 早く降りろ！」

「やばい、来たぞ！」

車はつり橋の方向に走り、そして轟音を鳴らした。

「くそ！」

「……連絡をしておくか。」

PPPPP

「どうした、テイガー？」

「ノエル」ヴァーミリオンの写真を見せたら村人に襲われた。この村で間違いないだろう。

そとにも2、3人いる。どうやら囲まれたらしい。」

「強行突破して村の中央に行け。」

この間とりつけた機能をフル活用しろ。」

「取り付けた機能について私はまだ聞いていない。いったいどんな機能を付けたんだ。」

「ああ、まだ教えてなかったか。」

今回お前にとりつけたのは遠距離用の武装だ。腕にさまざまな重火器を仕込めるようにしている。

とりあえず今はハンドガン程度の武器が仕込まれている。

何か使えそうな武器を見つけたら勘でとりつける。」

「了解した。」

P

「あーりえんなー（そこだ！）」

周りの村人が騒ぎ出す。

「……死んでいる。ゾンビではないらしい。」

死体を調べて扉に向かうと。

「……なんて力だ、だが、無理に開けるとはよくない。」

そう言つて二階に上ると。

「ハンドガンの弾丸か。勘でやれと言つても。」

そう言つて、テイガーはアームを開いてその中に弾丸を放り込んだ。

ちなみに「アタッシュケース」アーム」と思つてよい。

「窓ガラスか。此処から出られそうだ。」

そういうとテイガーは窓ガラスに向かって飛び込んだ。

「ギャア！」

テイガーは敵を独り踏みつぶした。

「……」

「……ハッ！ おっぱいのペラペラソース（八つ裂きにしてやる！）」

「ためしにやるか。」

テイガーは指を相手に向けて磁力を発生させるような感じに力んで

みた。

パン！

パン！

「あああ……」

「ほう、こんな感じか。確かに使えそうだ。」

隠して、テイガーのノエル「ヴァーミリオン」搜索任務が始まった。

opening (後書き)

原作やってる人なら後はわかりますね。
それでは

チャプター1-1-1 (前書き)

多分、本編です。

どうぞ

あの後、ティガーはその場にいた村人を倒しきった。

「さて、とりあえずあいつらのもたに行ってみるか。」

そう言っつて、一緒に来ていた警官の車が止めて行つた場所に行くつと。

「案の定と言つべきか。」

車は谷の底へ落下し、炎上していた。

「当初の目的通り中央に向かうか。」

過ぎたことを悔やまず、任務を優先する。

そして、しばらく行くと。

「クーン、クーン……」

そこにはトラバサミに挟まつた犬がいた。

「……」

ティガーは無言で犬を助けた。

「ワン！」

犬はすぐさま、近くの策を飛び越えて去つて行つた。

「ふむ、トラップか。」

そこには木の間にワイヤーが張つていあり、触れると爆発する仕組みになつている。

ティガーはが体が大きいため、張つていない部分を抜いたりすることはできそうにない。

「撃てばいいか。」

そう言つて、トラップを解除していく。

そうして、進み続けると、小屋がある。

「何かありそうだな。」

そう言つて、入ると……

「！……女も容赦なしか。」

ノエル・ヴァーミリオンは大丈夫か？」

そこには、スキで頭を刺された女の死体があつた。

ノエルを気にかけてつつも村に向かう。その途中の橋にさしかかると。

「バラバラにしてやる！」

「喰らうがいい！」

「ああ……」

軽く殺す。

P P P P P P

「よお、テイガー。」

「どうした、ココノエ？」

「ひとつ言い忘れたことがあってな。」

今回のお前の指は刃物の代わりになる。しかも真剣をも上回る切れ味だ。

ありがたく思え。」

「了解した。」

P

通信を終了してすぐに村の中央に着いた。

「なんだ？」

見ると、村の中では何かを焼いているようだ。

「テイガー、スコープアイ！」

もともとついていた望遠機能で焼いているものを確認する。

「あの警察か、何てことだ。」

重要な部分を見てから、テイガーは何かに気づいた。

「ほう、人間らしい暮らしをしているな。農業などで暮らしているようだな。」

つと、こんなことをしている場合ではなかったな。」

テイガーは全力で村に乗り込んだ。

「避けられまい！」

「よそ者だ！」

発砲すれば気づかれる。

「問題はない。」

そう言ったが、一人一人確実に倒していくと時間が足りなくなるわけ。

「くっ！ 流石に此処まで来ると面倒だな。」

人数はざつと十人。今まで通り肉弾戦でもいいが、如何せん敵の筋力と体力が半端じゃない。

「家に立てこもるとしよう。」

そう言って、入ろうとすると。

「あそこだ！ 逃がすんじゃねえぞ！」

「捕まえる！」「裏に回れ！」

「逆効果だったか。」

戸を閉めて少し考えていると。

「な、なんだ？」

急に鳴り響くエンジン音。家の子窓からのぞくと朝袋をかぶりチェーンソーを構える大男が向かっている。

「チェーンソーだ！？」

簡単には入れないようにタンスで戸を閉める。

その途端に、ガラスの割れる音が響く。

「殺してやる！」

釘を打ちつけられた窓から村人が押し入ってくる。

「まずいな。」

階段を登ると、そこには武器らしきものが掛けてある。

「ショットガンか、弾丸は先ほど手に入れておいたからな。」

箱からくすねたり、敵から奪ったりしてました。

「ハンドガンの時のように腕に入れればいいのか？」

そう言って、入れると案の定と言うべきか掌の部分が開いて銃口となった。

「そこだ！」

とりつけてすぐに村人が入ってきてしまった。

「クソッ！」

最初のように窓を破り、屋根の上に出た。

「さて、ためにしに打つとするか。」

民家の窓に向かって発砲すると、ショットガン特有の散らばる弾丸が掌から飛び出た。

「リロードはどうか？」

アームの部分をつ張ると薬莢が飛び出て新たな球が補充された。

「はは、なかなかできるものだな。」

そんなことを言っていると、チェインソーを持った男が襲ってきた。

「甘いぞ！」

男の頭にショットガンを発砲。

「があ！」

「まだ生きているのか？」

その男は、ショットガンで頭を撃たれたにもかかわらずまだ生きている。

「首を掻き切つてやる！」

人差し指を変形させてチェインソー男の指を切る。

「ああ……」

「さすがに首を切れば死ぬか。」

気楽な事を言っていると、徐々に村人が増えてきた。

「増援か、仕方がない。」

テイガーは屋根から降りて、村の開けた部分に出た。

当り前ではあるがそんなことをしては周りから村人が多数近づいてきて囲まれてしまう。

「充電120%完了！これが超電磁の力だ！」

「な、なんだこいつは!？」

「引き寄せるぞ！」

テイガーを囲んでいた村人は一掃された。

「こんなところだろう。」

そんなことをやっているとき、鐘の音が聞こえてきた。

「あ、中野バーガー（鐘だ）」「へえ、そうなんですか（お祈りの

時間だ)」「てめーも助ヒーローズ(行かなければ)」「サドラー様。」

村人は鐘の音にひかれるように村人は教会に入って行った。

「……どうなっているんだ？」

チャプター1-1-1 (後書き)

こんな感じでした。

ちゃんと最後まで書きますよ。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361r/>

biohazard 4 the magnet

2011年7月27日22時35分発行